

祭りの持続的環境に関する現状と課題

—三重県鳥羽市の事例を対象として—

藤 喜 一 樹

1. はじめに

限界集落とは、この言葉の提唱者である大野晃氏の定義によれば、65歳以上の高齢者が集落の半数を超え、独居老人世帯が増加したために、社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落のことを指す。そしてこの状態からやがて限界を越えると、人口・戸数ゼロの集落消滅に至るとされている（大野、2005）。

ある世代は残り、別の世代は他の地域へ移動して、そこに居住する。こうして世代間の地域社会の住み分けが進行する。そして、戦前生まれ世代、戦後直後生まれ世代、低成長期生まれ世代はそれぞれ、親、子、孫の関係にも当てはまるので、この間に起きた現象は、家族の視点から見れば、家族構成員の地域住み分けともなる。そしてこうした住み分けの結果として、戦前生まれ世代までの人口のみがより多く堆積する場所が現れ、その場所が、加齢に従って、2000年代までに超高齢地帯として立ち現われることとなったのである（山下、2012）。

農山村では、役職層の確保、道役などの共同作業の維持・氏神の祭礼の維持といった人口減少に伴う集落自治の機能低下が問題となっている（大野、2005、107～108頁）。

現実には、集落自治の機能と関わりのある祭りを成立する条件がどのような状態にあるの

か見ておく事にしたい。ここで祭りを支える新旧の担い手が調和的關係にあると位置づける祭礼研究に対し、その議論が「予定調和的傾向」にあるとして批判する立場もある。芦田は、「祭りが『内部』を結束させ、成員に生きる意味を付与するとはいっても、その背後には『外部』に対する様々な差別、排除、抑圧、暴力、犠牲等が張り付いていたのであり、今日でもそれが顕在化することは珍しくない」（芦田 1999：100）ことを指摘し、近年の祭礼研究の動向に批判的な態度を示している。

農山村の祭事を前提とした植田今日子の研究では、「太鼓踊り」の事例について、先祖への「返礼行為」、初盆のたびの「慰めの交換」というムラ務めが踊りの本来の文脈であり、それを離れた「保存」が集落の人びとに受け入れられなかったと指摘している（植田、2007）。

同じく農山村の祭事を前提とした藤村美穂の研究では祭礼を繰り返し行うことと日常生活との関係について次のように述べている。人びとの「暮らしの輪郭をつくり、支えているのは、繰り返しおこなわれる神楽」であり、「めぐって季節に合わせて繰り返し行われる田畑や山での作業」であり、何よりそうした「繰り返しを当然のこととして受け入れる人びとの力」（藤村、2009、253頁）なのだと言う。

また都市の祭事を前提とした秋野淳一の研

究によると、神田祭は体系化された信仰体系に基づく祭礼ではなく、形を整えつつも変容してきた地域社会の不断の賜物だ。そこで継承が試みられているのは、祭信をめぐる信仰ではなく、地域の紐帯なのだと分析した（秋野、2018）。

一方、災害を契機としてネットワークの強化が図られた庄司貴俊の研究では、「原発事故から7年後に祭礼が復活した理由」を他地域で生活を再建した人には、震災前の生活構造に関与することが難しい。そうした震災前の生活構造に参加できない人も祭礼や漁業により、ネットワークに巻き込むことができる。原発被災地での活動の根底には、原発被災地の復興を考える上で、生活構造の完全な再構築（強固なネットワーク）だけでなく、部分的な再構築（緩やかなネットワーク）にも目を向ける必要があるのではないかという点を指摘した（庄司、2022）。

都市祭礼とは異なり、少子高齢化・過疎化という2つの条件が重なっている限界集落では、現在祭りを実施していくのがきわめて難しい時代に直面している。実際限界集落に近づいていくほど、地域内でのつながり、あるいはネットワークの力が弱くなっていく。また他出した人にとってはふるさとであっても、次世代以降は完全にふるさとではなくなる。祭礼の意味においても、本来の意味があったはずであるが、なぜその行事をしなければいけないのか、生活様式が受け継がれていない現在では見失われてきているのではないのだろうか。かつてはムラ社会の一員として同じ価値観を共有している時代もあったが、現在では同じ集落でも価値観が多様化し、前世代と次世代とのすみ分けが行われているのも一般的ではないのだろうか。本稿では三重県鳥羽市石鏡地区を研究の対象とするが、祭りの持続的環境に関する現状と課題を見ていく際には、以上のような社会的状況に鑑みている。

2. 鳥羽市石鏡地区の概況

鳥羽市は1954年（昭和29年）11月1日、市政を施行した。国勢調査によると、1955年（昭和30年）当時の人口は30,121人であった。2020（令和2年）時の人口は17,525人である。鳥羽市石鏡地区では1955年（昭和30年）当時の世帯数は212世帯、人口は1,158



図1 三重県南勢地域の概況
(出所) 筆者作成



図2 三重県鳥羽市石鏡地区の位置
(出所) 国土地理院 2008年 鳥羽
50000分の1地形図を加工

人であった。2020年（令和2年）時の世帯数は188世帯、人口は340人である。鳥羽市全体より、さらに石鏡地区での人口減少が著しいのである。2020年（令和2年）時の石鏡地区での一般世帯数は112世帯であり、76世帯が空き家となっている。夫が65歳以上、妻が60歳以上の世帯は40世帯、65歳以上の単独世帯は35世帯である。

2022年（令和4年）3月末日の鳥羽市の統計では、鳥羽市の高齢化率は40.2%を占めている。石鏡地区の高齢化率は53.2%を占めている。鳥羽市全体より石鏡地区の方が高齢化は進んでいるのである。若い世代を見ていくと、鳥羽市では18歳未満世帯員のいる一般世帯は1,110世帯であるが、石鏡地区では18歳未満世帯員のいる一般世帯はわずか7世帯にすぎない。特に鳥羽市全体以上に石鏡地区では少子高齢化が進んでいる。

鳥羽市石鏡地区は、東斜面を海岸に下って集落が密集する。海岸線は海食崖で平地が少ない。石鏡地区の産業として、サザエ、アワビを採る海女と刺し網業の他に、1973年（昭和48年）のパールロード開通とともに沿岸部が通行できるようになると共に観光地化が進み、民宿・旅館が増えた。それまでは、鳥羽市街地まで1日3便の巡航船で片道約1時間を要した。2015年（平成27年）の国勢調査によると、15歳以上の就業者数で鳥羽市全体では9,953人が就業しており、宿泊業、飲食サービス業が2,026人であり、漁業は1,285人である。石鏡地区では251人が就業しており、漁業は71人であり、宿泊業、飲食サービス業が63人である。石鏡地区では鳥羽市全体とは異なり、漁業が宿泊業、飲食サービス業を上回っているのである。

3. 研究目的

石鏡地区では、4つの「組」からなる配（ハエ）という地縁組織があった。北組（きたぐ



写真1 鳥羽市石鏡地区をパールロードから眺める（出所）筆者撮影



写真2 鳥羽市石鏡地区の港の様子（出所）筆者撮影



写真3 海女さんの使う乗り合い船（出所）筆者撮影

み)、中組（なかぐみ）、御堂組（みどうぐみ）、南組（みなみぐみ）という4つの配から成りたっていた。配は自治に関する意思決定の基盤、共同作業の基盤、祭祀の基盤という3つの機能があった。

2003年（平成15年）に、配が解体された⁽¹⁾。本稿では、この配が解体された後、石鏡地区

でムラ社会の祭事を進めていくのに、町内会長と5人年寄と石鏡活性会はどのような役割を果たしてきたのであろうか。また石鏡地区で祭事を進めていくのにこれらの主要なアクターを取り巻く環境では、どのような問題点が生じてきたのかをフィールドワークから考察していきたい。

4. 主要なアクターについて

(1) 5人年寄

5人年寄とは、この地区の伝統的な儀式を実施していく上で中心になる人達なので、見習いから入って10年間は、その責任を果たす年代となる。かつては5人年寄は67歳で入って10年間であった。現在は6年間の任期である。5人年寄組織というのは従来、勇退された大老と呼ばれる人が1人と、あと5人年寄り（1年生から5年生）と居て、その見習いで入る老人として、仮元、地下の元、谷の元、亭主が4人いた。そして、夫婦健在でなければいけないという条件があった⁽²⁾。

2023年（令和5年）5人年寄の体制 （2023年12月末日までの組織）

5人年寄	5年生	昭和23年生まれ男性（漁師ではない）
	4年生	昭和24年生まれ男性（漁師ではない）
	3年生	昭和25年生まれ男性（漁師ではない）
	2年生	昭和26年生まれ男性（漁師ではない）
	1年生	昭和27年生まれ男性（漁師ではない）
	新入り	昭和28年生まれ男性（漁師ではない）

2007年（平成19年）5人年寄の体制

大老	宮本又一郎	元漁師	80歳代
5人年寄	宿老	細木忠夫	旅館の大將 元鳥羽藩家老の家
	4年生	里中佐太郎	
	3年生	山本島雄	
	2年生	山本勝	死亡
	1年生	山本善衛	現在施設に入院 元漁師
	地下ノ元	城山清助	死亡 元漁師
	谷ノ元	河村清吉	ゆうらん船の経営
	亭主	宮本久三郎	80歳代 元漁師
新入り	仮元	木村良三	死亡
新入り	亭主	里中石雄	死亡 元漁協組合長

注) 2023年（令和5年）現在の状況は名前の後に示す

(2) 町内会長

現町内会長のM氏は、父親が漁師で母親が海女であり、巻き網船の次男として1968年（昭和43年）10月生まれた。M氏は2021年（令和3年）4月より石鏡町内会長を務め、日頃はルアー遊漁船の船長をされている。M氏は父親の刺し網、延縄漁船に乗り、30歳の時にルアー船を立ちあげた。前町内会長は漁業者ではなく、市外で自営業を営みながら石鏡で暮らしていた。また前々町内会長も漁業者ではなく、旅館の社長で石鏡で暮らしていた。

(3) 石鏡活性会

石鏡活性会は、石鏡から転居していった若年から中年層にかけての男性を中心に構成された組織となっている。石鏡では、少子高齢化・過疎化により年中行事や共同作業を実施するのが困難になってきた状況を受けて、町内会長のサポーターとして機能している。

活性会のメンバーは15人で地元の住んでいるのは3人である。その他は鳥羽市の中心部、志摩市の中心部の鵜方などに住んでいる。石鏡で配、いわゆる組が解体された後、大きな役割を果たしてきたのが石鏡活性会である。元々消防団の太鼓クラブのメンバーが集ってできた組織である。

5. 5人年寄も協力する伝統行事である禊人のおちね

石鏡地区では、12月31日の夕方の4時頃、最初3人の禊人（とうじん）は石鏡神社の扉を開ける。禊人の役割は1月1日の午前5時まで5人年寄の2名と、12時までにおちね廻りを終えた禊人3名が神社にこもるまで続く。おちね廻りの最初、禊人が神社へのお供え、真ん中にタイ、それとお酒、お水、塩、野菜、フルーツを供えるのがしきたりである。禊人が神社へ参った後、1軒、1軒、全112軒を禊人がこの日の夕方から始める。昭

和には200軒以上廻らなければならない時代もあったのである。この禊人は、その年の内、死人が出た家には行かない。禊人は3人で後ろに3人がついてくる。禊人の3人は53歳の人が役をするのであるが、同級生の生まれの早い者順に、長老、男役、女役と3者の役割を引き受ける。ただし、この年、親戚の人が亡くなっていれば、この役にはつけない。

おちね廻りは、禊人が大魚、家内安全を禊り、その家の穢れを払う為、厄除けとして伝統的に続いてきた石鏡地区の行事である。各家では、禊人の長老が「こなたにお祝いすみましたか」と呼び、禊人の男役が「こーめ」と呼び、禊人の女役が「大柘一升、おめでとうございます」と呼ぶ。3名の禊人は赤と黒の着物を着て、センスを振り上げながら挨拶をする。各家では禊人の生まれが早い順に当主からお神酒をいただく。



写真4 鳥羽市石鏡地区の禊人のおちね
(出所) 山本茂紀・和子 2013年
『海女の町調査報告集
鳥羽市(石鏡町・国崎町・相差町)』より引用

各家では料理を作っている。めでたい行事の為、ごちそうの準備をしているのである。ごちそうはタイなど魚類がほとんどで、魚やお寿司をよばれたり、つまみを食べたりしたのである。禊人についてきた後の3人は、お

菓子、みかん、お餅をまいてもらい、拾うと同時に運び役となる。この3名は禊人の親戚の人である。禊人は訪問先の当主にお礼に「ヤサーヤサ ヤサーヤサ ヤサーヤサ ウォー」と3回繰り返す。このしきたりは、禊人にとっても体力的にきついし、お酒が飲めないと成り立たない。

おちね廻りについての課題として、町内会長は「サラリーマンが多くなってきて、役を受け入れてくれませんか。役をしたがらないし。世代が変わってきて、人数が集まらないので」という。また「若い世代にとっては、この行事をする意味がわからなくなってきたし、若い人が賛同しなくなってきたので。いつまでしとるのという声が出てきたんですわ」という。

実際、石鏡地区は急な坂のところの家が密集し、相当足腰が強くないと体力的にこの役は務まらない。また相当酒に強くないと、最後までこの役を務めることができなくなる。令和の時代に、男性に限定され酒に強くないと実施できない祭事となると実施できなくなるのは、他の祭事も一緒だと考えられる。2020年(令和2年)の正月以降、この行事は廃止されたのである。

6. 5人年寄が関わる弓引き神事

弓引き神事は2020年(令和2年)以降廃止されたが、それまで1月11日(近年は1月3日)に実施されてきた。5人年寄である老人2名が3対、6本を引く。5人年寄で的を射る人が2名で、最初から最後まで座っている人が4名である。そして若い衆5名が2対、10本を引く。最後に、止め矢を5人が1本ずつ、5本引く。5人年寄で矢を射るのは2名だが、年の上から2番目と3番目の老人が矢を射る。「大漁でありますように、健康でありますように」との願いを込められた神事である。この時、女性は、囲いの中に入れ

ないし、子どもも、囲いの中には入れない。甘酒を釜で炊くのが女性の仕事である。

弓引き神事は厳粛な行事であるが、弓の飛ばしあいになり、弓を射る者は、上手くやってお客さんを笑わせる。100メートル向こうに的がある。3メートルから5メートル先に矢を落としてはいけない。若い衆の1番年上が女役、次に年上が男役をし、女役の人は男が女の服を着て変装し化粧して、カツラもかぶる。男役の人が化粧をする。5人年寄の話によると「前に矢を落とすと縁起が悪いと言われるんですわ。落とすと、誰もしゃべってくれないし、冗談も言えませんわ。矢を落として粗相をすると、本人も家族もしんどい思いをするし、そのため、矢を射る人間は最後まで緊張するんですわ」と言う。

また5人年寄の話によると「若い衆は、弓の飛ばしあいであり、本来、ただやったら良いというわけではないんですよ。細かい作法は忘れられ、本来の弓の渡し方、作法は受け継がれていません。細かい事を言うと、ようしなくなるからですわ」と言う。漁師や海女達からは「ただくさな事ならせん方が良い。するならきちんとしてほしい。ただ笑っているなら、やらん方が良い」という声が出ている。

弓引き神事は2023年(令和5年)12月に5人年寄が解散する予定で(2023年11月現在)、メンバーもそろわず、復活する兆しが見えない。保存会などの形態をとって、形が変わらなければ、この神事を継続する事ができない。弓引き神事において町内会長の話による「昔は4つの配で甘酒を作っていたんですわ。各配でお金を出し合ったもんです。1つの配から5万円とか10万円は出していたんです。今では全部で4万円から5万円、石鏡活性会も協力している町内会主催のヒジキ刈りの水あげで得たお金を経費として出しているんですわ。昔は弓引き神事後、配で飲み食いをする為に、今より多くのお金が必要

であったわけですが、今では全く飲み食いをしなくなったもんです」と言う。またこれとは別に、町内会長によると「これまで町内会から毎年10万円の補助をしていましたので」と言う。

引き続き町内会長の話では「今の人は全然意味が分かっていないんですわ。昔の人は行事をする意味が分かっていたもんです。サラリーマンは意味が分かっておらず、ただ続けているだけです。昔は漁師の家でも、今ではほとんどがサラリーマンになってしまったもんです。世代が変わって分からん事だらけになってしまったんですわ」と言う。

今の石鏡地区ではコロナ禍にかこつけて行事が縮小されている。仮にコロナ禍がおさまったとしても、少子高齢化・過疎化で、無理な行事ばかりになってきたのである。

7. 5人年寄も石鏡活性会も協力した聖霊送り、ダーボー行事

毎年お盆の行事として8月14日には、午前9時から石鏡地区の園照寺で山門大施餓鬼が行われる。この時間には、町内会長、5人年寄、檀家、市議会議員、初盆の各家1人の出席で行われる。一般は午前10時から12時の間に、施餓鬼棚に各自で参る。8月15日には、午前6時から一斉念仏が行われ、海の方に向けて念仏を申す。午後3時から、仏祭送があり、市場前埋立地で新盆の家から送る。一般の家は、新盆の家が送り終わった後、午後4時から送る。8月16日には午後4時から聖霊送り、いわゆるダーボー行事が行われる。新盆の家は、寺に行かず浜の前のテントに集まる。

ダーボー行事は道幅の狭い急な坂を歩き、勾配が下がっていて、人が密集すれば、歩くのが危なく転ぶ可能性がある。初盆の人の送りは5人年寄が主体となった行事である。石鏡活性会は太鼓運びの仕事、および段取りを

する。太鼓運びの仕事は年いった人ではできないからである。活性会のメンバーの力を借りなければ、ダーボー行事は成り立たないのである。本物の太鼓は重たく、かつぐ人が4人いなければ成り立たない。お寺の前で5回—7回—5回と太鼓を打つ。そして寺から浜への坂道では、太鼓を下してくる。午後4時から聖霊送り、ダーボー行事が行われる。この行事では、新盆2023年(令和5年)の場合、17軒の戒名が読み上げられると、その親族が「とうろう」を太鼓の合図で地面に叩き付けてつぶして、新仏を送る。最後に太鼓の合図で全員が「とうろう」を叩きつぶすのである。



写真5 鳥羽市石鏡地区—お寺から太鼓を下ろしている様子
(出所) 山本茂紀・和子 2013年『海女の町調査報告集 鳥羽市(石鏡町・国崎町・相差町)』より引用

5人年寄は石鏡活性会との関わりを「ただ石鏡に来るだけ、義理でしているだけ。昭和30年代生まれまでは地元に愛着があったんですが、それ以降は愛着がありません。自治会長、活性会に頼んで、できるだけ事はしてもらっています。鳥羽市内、伊勢市内におっても日当1万円は払います。行事に参加してもらうのにお手当を出しているわけですわ。石鏡に来てもらうには、仕事を休んで来てもらわなければなりません。タダでは来てもらえないもんです。石鏡の為に頼むのも年に1回や2回が限度で、頼まなければ来てもらえないわけです。石鏡の為に、好き好んで来ているわけではないので。出ていった人には、妻も子供もおり、嫁さんにも物が言えない時代です。外へ出ていった人に気楽に頼むというわけにはいかなくなってきているんですわ」と言うのが今の状況である。

町内会の総会では、2023年(令和5年)4月、令和4年度の決算報告の場で、令和5年が聖霊送り、ダーボー行事が最後の年にすると多数決で決めたのである。世代が変わってきた為、廃止せざるを得なくなったのである。

8. おわりに

近年急速に、これまで実施されてきた祭事が全国的に廃止されてきているが、ここ三重県鳥羽市石鏡地区においても、コロナ禍を契機として、平成の時代から令和の時代をまたぎ、地域の文化・伝統のある由緒ある祭事が消滅している。

祭りの持続的環境を考えていく上での条件として、三重県鳥羽市石鏡地区の場合、これまで町内会長、5人年寄、石鏡活性会が大きな役割を果たしてきた。

現在の町内会長は、漁師、海女などの漁業者とサラリーマンでは意識の上で、大きな溝ができていた事を自覚していた。サラリーマン世代になっていくと、これまで実施してき

た祭事の意味が分からず、なぜその行事を続けていかなければならないのか理解できなくなっている現状を懸念していた。

祭事においても重要な役割を担ってきた5人年寄であるが、昭和29年生まれ以降、継続的に毎年5人年寄に入会する条件が整わず、2023年（令和5年）12月末日をもって廃止になる。石鏡地区では、祭事において男性の高齢者が中心的な役割を担ってきたが、祭事におけるジェンダーの問題や、祭りにおける役割分担について、再構成しなければ続けていくのが難しい時代に直面している。

石鏡活性会では、少子高齢化・過疎化している石鏡地区のサポーターとして大きな役割を担ってきたが、石鏡在住の前世代と他出した活性会の主なメンバーとの価値観、意識面での差異が近年顕著に表れていた。実際他出した世代にとって、「ふるさと」意識が希薄化しており、時代の変遷の中で、家意識、ムラ意識が消滅しかかっている状況に直面している。

現実には外部アクターの力を借りれば、祭りが維持していけるように見えるが、人的資源、物的資源、あるいは運営資金をどのように調達し、全体をどのようにまとめていくのかは、ここ三重県鳥羽市石鏡地区に限らず、全国で散在している過疎地域では、課題になっているに違いない。

註

- (1)現在の石鏡地区では主に、町内会長、漁協、刺網組合、釣船組合、海女組合、石鏡活性会、旅館組合という組織がある。この中で石鏡地区の年中行事を進めていくのに大きな役割を果たしているのが、町内会長と5人年寄と石鏡活性会である。
- (2)5人年寄の1年間の最も重要な役割として、園照寺で祈祷を受けた般若の札配り200枚分を、1月4日、4月4日（海女の磯おり合わせ祈祷の日、海女にもらってもらう為）、12月10日に漁協前

で午後から配る役割があった。この般若の札（海上安全 大漁満足 家内安全 招福除災）は5人年寄が作製していたのである。

引用・参考文献

- ・ 秋野淳一『神田祭の都市祝祭論—戦後地域社会の変容と都市祭り』岩田書院、2018年。
- ・ 芦田徹郎「現代都市祭礼のアイロニー —祭りの不可避性と不可能性をめぐって」『宗教と社会別冊』(3)、1999年。
- ・ 藤村美穂『暮らしの本願と景観—山村の伝統芸能、鳥越皓之・家中茂・藤村美穂編、景観形成と地域コミュニティ—地域資本を増やす景観政策』農山漁村文化協会、2009年。
- ・ 大野晃『山村環境社会学序説—現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会、2005年。
- ・ 庄司貴俊「原発事故から7年後に祭礼が復活した理由—福島県浪江町請戸の出初め式の事例—」『村落社会研究ジャーナル Serial No. 57』日本村落研究学会、2022年、1—12頁。
- ・ 植田今日子「過疎集落における民俗舞踊の「保存」をめぐり—考察—熊本県五木村梶原集落の「太鼓踊り」の事例から—」『村落社会研究ジャーナル Serial No. 27』日本村落研究学会、2007年、13—22頁。
- ・ 山本茂紀・山本和子『海女の町調査報告集』太陽出版、2013年。